

## 鴨緑江河口湿地で初めて発見された ズグロカモメの大繁殖群

白清泉・任書寛・秦海龍・李景梅・王文革

訳 福井和二

ズグロカモメ <sup>ヘラサギ</sup> 黒嘴鷗 (*Larus saundersi*) は世界における絶滅危惧種の一つであり、中国のレッドデータブックに収録され、国家二級保護鳥類に規定されている。この2年ほどに数えられているズグロカモメの数は4000~5000羽といわれている。

現在までの記録では遼寧省丹東地区に少数のズグロカモメが認められていた。筆者らは2002年5月末から6月初めに至る2週間、鴨緑江河口湿地自然保護区核心区において第1回調査を行った。多方面の調査結果により、丹東鴨緑江河口湿地に大きなズグロカモメの繁殖群があり、数も非常に多く、巣も集中してをり、保護も容易であることがわかった。

保護区の核心区は外洋に臨む河口の左岸で、ヨシの生えた沼沢、湿地、海辺の干潟の三つの部分を含む河口海岸に形成された生態系である。その内ヨシの生えた沼沢が3280ha、もちろん主要植物はヨシで、平均密度80~120株/m<sup>2</sup>、その中にガマ、ショウブ、マツナなどの植物が混在し、サギ類、シギ類、ズグロカモメ等に生息場所を提供している。干潟面積は5150ha、ゴカイなどのが生息し、ズグロカモメなど多くの鳥類に食物を提供している。

筆者らは多方面の現地調査を行ない、裸眼による観察を主とし、眼鏡(5×)によるズグロカモメの直接計数を記録し、現場写真と合わせ精査した。対象区域は養魚場、エビ養殖場、海岸干潟、ヨシの生えた沼沢、水田、塩田、崖地などで広く調査を行った結果を以下に報告する。

### 個体数と分布

1. 中部哨流溝ヨシ原湿地；哨流溝橋以南の面積約2.5km<sup>2</sup>のヨシ原湿地のうち、主に湿地の東南部、いくつかのエビ養殖場を含む地域で、39° 50' N, 123° 36' Eに位置する。毎回、陰暦3日と18日の大潮にはヨシ原の湿地に浸水し、ヨシ原湿地に人を立ち入れなくしている。附近の古老によれば、その中に幾つかのズグロカモメが沢山いる場所があるとの話である。筆者らも常々数十から百羽近いズグロカモメがエビ養殖場の土手で休息していたり、上空を飛んでいるのを見ていたので、この中にズグロカモメの大きなコロニーがあるのではないかと考えていた。6月9日筆者らは再び二つのズグロカモメの大群がヨシ原の中にある二つのエビ養殖場の土手にいるのを発見した。その中の1群は217羽(3回計数平均値)。他の1群は74羽ほどで、合計300羽近くになる。その中には褐色を帯びた幼鳥も少なからず混在していた。この群は現在までに発見された最も大きい群と思われる。

ここで営巣されている巣は非常に隠蔽されていて、天敵や人に破壊され難い利点がある。また附近は水量が多く、エビ養殖場があり、食物が豊富である。筆者らの僅かな調査期間、5月28日から6月13日までの間に26個のズグロカモメの巣を見つけ、多くの雛と孵化後の卵殻を観察した。発見した26個の巣の間隔は1mに充たないものであった。筆者らはエビ養殖場の土手に6個の巣を見つけ、その内5個がズグロカモメの巣であり、他の1個はセイタカシギの巣であった。国内の他の保護区と異なるのは、発見されたほとんどの巣がヨシの群落中にあり、しかも19巣はヨシの根もとに、ヨシの葉を巣材にして造られていた。他に7巣がマツナの生えた土手の土の上に営巣し、中には巣材にわずかなヨシの葉を使用しているものもあった。ヨシの根もとに営

巣したものと、草丈の短い(10~20cm)マツナの中に営巣したものでは隠蔽性に差があり、きわめて発見されやすく破壊されやすい。ヨシの中の巣とマツナ群落の巣の比は19:7(73%:27%)で、前者は後者の約3倍にあたる。なぜ、鴨緑江河口湿地のズグロカモメがヨシ原を繁殖の環境に選択しているのか、いま説明することはできない。さらに観察を進める必要がある。

この区域にはカモ類、セイタカシギの巣もあり、同時に発見されているアカアシシギ、ホウロクシギなどの鳥類、まだ発見されていないユリカモメ、すでに発見された大量のズグロカモメ、160羽/km<sup>2</sup>という彼らの巣などの調査も進めなければならない。

2. 東海岸の泥質干潟で5月27日、筆者らは20余羽のズグロカモメが干潟におりているのを発見した。そこは、一望無限というほど幅も奥行きも広い干潟であり、植被も稀である。

3. 中部のエビ養殖池、このあたりの主要な環境はエビ養殖池である。5月28日、二つの排水された養殖池に、合わせて17羽のズグロカモメがゴカイなどを採食していた。周囲の土手に、数は少ないが営巣しているズグロカモメを見かけた。

4. 西部の岬、後方にある水田が主要な環境。5月31日、水田の畔の上に10羽ほどのズグロカモメと100羽近くのその他のカモメ類がアヒルと混群をつくっていた。当地の人々は、彼らがケラを食べにここに集まるのだと言っていた。

5. 西南部の塩田と南部の小島、ここではズグロカモメを見ることはなかった。塩田には植被がまったく無く、小島には人口が多く、ズグロカモメの生息する可能性は少ない。

6. 南部の海洋紅農場、エビ養殖池が主要な環境。6月10日海洋紅農場と哨流溝の合流部で数十羽のズグロカモメを発見した。

以上の各所で発見されたズグロカモメの総計は500羽ほどであった。

### 営巣状況

5月28日筆者らは第1回ヨシ原湿地の調査において卵殻を発見した。これは丹東地区においては28日以前にズグロカモメの孵化が始まっていることを証明している。ズグロカモメの卵は緑色あるいは帯黄色に褐色の斑点がある。

ある巣には3個の卵が、またある巣には1、2個の卵が巣内に見られ、巣の周囲数m以内にカラの卵殻が1、2個散乱し、近くに巣の痕跡を見ることがなく、また、ある巣では巣が破壊され、ズグロカモメの死体が残されており、抱卵中と思われる卵殻が散乱していた。その他、天敵の被害にあったものと思われる雛の死体らしきものも残されていた。しかし、ヨシの間や地上に微動だにせず、じっと雛を逃れようとしている雛たちを見ることができた。

### その他の発見

人がコロニー内に立ち入ると、ズグロカモメの群れはその上空を旋回飛翔し、交互に急降下して侵入者に“ga-ga-ga”と響く声で脅かしながらズグロカモメ特有の集団防衛で攻撃を加えてくる。彼らのコロニー防衛行動はきわめて激烈で、ある時は、急降下しながら糞を頭上にかけて脅す。しかし、彼らは障害を与えるほどの攻撃を加えることはない。人に対する攻撃のほか、筆者らは1羽の猛禽を百羽に近いズグロカモメが攻撃し、追い立てるのを目撃した。

調査期間中に筆者らはズグロカモメがゴカイなどの底生動物を採食しているほか、6月11日多くの小魚を捕食し、雛に給餌するのを、土手の上から観察した。

### 生存に対する脅威

外洋に面した河口湿地では、人の存在がズグロカモメに対して最も大きな脅威となっている。その主なものは、

1. 当地の人々はズグロカモメ (黒嘴鷗をツグロカモメ小黑頭と言う) の卵を拾い集めている。5年ほど前には多い人は300個ほどのズグロカモメの卵を拾ったと、ある老人は言った。少ない人でも80くらいは拾っているだろうとも言った。このことは、今日までズグロカモメが繁殖していた規模と、また、人々がズグロカモメの繁殖に対し相当の圧力をかけていたことを物語っている。
2. 筆者らは海岸の干潟でゴカイを掘り集めて、輸出する業者に売っている人々を見ているが、ゴカイはズグロカモメの重要な食物なのである。

### 提案

1. 前述のように多くのズグロカモメがエビ養殖池に集まっているのには、それだけの理由があり、四面が氷面で、小さな土手に囲まれ、そこに6巣を見つけたことは、決して偶然ではなく、四面が水の世界では人の立ち入りがきわめて少なく、したがってズグロカモメなど鳥類の好適な営巣地となっている。そこで、保護区ではこの養殖池の数ヶ所に小さな監視所を設け、エビ養殖池の小さな土手をズグロカモメが繁殖しやすい形に拡大することは実用的な提案だと信ずる。
2. 繁殖期には巡回者を派遣して、ズグロカモメの重要性を土地の人に説明し、広報、宣伝に努め、卵を拾う行為を抑制し、ズグロカモメの繁殖に対する脅威を取り除くことが必要である。